

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22237

研究課題名（和文）日本語学習者の音韻習得における聴取の研究

研究課題名（英文）Effects of perceptual training for the learners' phonemic acquisition of Japanese

研究代表者

大久保 雅子 (Okubo, Masako)

早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授（任期付）

研究者番号：80835611

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語の音韻を正確に聞き取れない学習者のための聴取練習e-learning教材を開発し、その効果の検証本研究を行った。「無声・有声破裂音」、「ナ行音・ラ行音・ダ行音」を取り上げて研究を行ったところ、e-learning教材を活用した聴取練習によって学習者の音韻習得が促されていったが、習得過程には個人差がみられることが明らかになった。そのため、学習者を三つのタイプに分類し、練習方法の提案を行った。さらに、本研究結果から「学習者の自律学習を促す学習サイクル」を示し、ブレンディッド・ラーニングへの導入方法に関する提案を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、学習者が苦手としている音声項目を十分に練習できるe-learning教材は少なく、特に、日本語の単音レベルに焦点をあてた教材が極めて少ないという現状があった。本研究により、学習者が自分の苦手とする単音レベルの練習ができるe-learning教材を開発できたことは、大きな学術的意義があると言える。また、本研究で学習者の個人差が明らかになり、習得過程の分類がなされたことによって、ブレンディッド・ラーニングのモデルを提案できた。このモデルは、様々な音韻習得に応用が可能であると考えられ、日本語音声教育に大いに貢献できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to evaluate the e-learning system I developed for learners' phonemic acquisition of Japanese. The parameters for the evaluation used were "unvoiced, voiced plosive" and "Na line sound, La line sound, Da line sound." As a result, it was found that practice with the e-learning system enhances the learner's phonemic acquisition of Japanese, and also that there are different acquisition patterns individually. Consequently, three different practice methods based on the acquisition patterns found in this study are proposed. Furthermore, the concept of "The practice cycle to enhance the learner's self-study for phonemic acquisition of Japanese," is proposed as a method of introducing blended learning.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語音声教育 日本語音韻習得 e-learning教材 自律学習 ブレンディッド・ラーニング 有声・無声破裂音 ナ行音・ラ行音・ダ行音 聴取練習

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2019年に外国人受け入れ拡大に向けて出入国管理法が改正され、今後、日本に滞在する外国人が急増することが予想されている。それに伴い、外国人が日本語を正確に聞き取れずコミュニケーションに支障をきたすケースも増えることが予想され、音声教育の需要が高まっている。近年、日本語教育においては、数々の日本語発音学習教材が出版され、大学等の高等教育機関では様々な音声教育実践の取り組みが行われるようになってきた。しかしながら、音声上の問題点は母語によって異なるため、複数の学習者がいる教室の中で、学習者毎の問題点に焦点を当てた指導や練習の時間を十分に確保できないという現状がある(戸田・大久保 2014)。一方、現在は日本語発音関連の e-learning 教材が幾つか開発されており、学習者の自律学習も可能になりつつある。しかし、学習者が苦手としている音声項目を十分に練習できる e-learning 教材は少なく、日本語の単音レベルの聴取に焦点をあてた e-learning 教材は管見の及ぶ限り見当たらない。今後、教育のオンライン化が進むことが見込まれているため、学習者のニーズに合った e-learning 教材の開発および構築は急務である。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の二つである。

- ・ e-learning 教材によって、学習者の音韻習得が促されたかどうかを明らかにする。
- ・ e-learning 教材を使用したブレンディッド・ラーニングの効果的な方法を提案する。

本研究ではまず、目的を達成するための e-learning 教材を開発する。この教材では、「無声・有声破裂音」および「ナ行音・ラ行音・ダ行音」を取り上げる。

は、主に中国語母語話者や韓国語母語話者にとって習得が難しいと言われている。中国語母語話者を対象とした研究は複数みられるが、韓国語母語話者を対象とした研究は少ない。さらに、先行研究で行われた調査は定量的なものが多く、学習者一人一人に焦点をあてた研究は管見の及ぶ限り見当たらない。そこで、本研究では、中国語および韓国語を母語とする学習者における本 e-learning 教材の継続使用による誤聴傾向の変化、習得過程を調査し、学習者の音韻習得が促されたかどうかを明らかにする。

は、中国南方方言話者に多くみられる混同である。日本語音声教育における中国語母語話者の音声上の問題点は数多く指摘されているが、中国語方言の影響に着目した研究は少ない。外国語の音声習得において、母語の影響が顕著に現れることが指摘されているが、中国語方言は中国共通語と音声特徴が異なっているため、母方言の影響を踏まえ、調査・研究を行う。

次に、目的を達成するために、本 e-learning 教材に「振り返り」機能および BBS 機能を搭載する。この機能の効果を検証し、e-learning 教材を使用したブレンディッド・ラーニングのモデルを提案する。

3. 研究の方法

およびの目的を達成するために、以下の調査を行う。

【調査1】運用調査

本 e-learning 教材の使用データから、学習者の音韻習得が促されたかどうかを検証する。また、練習過程の誤聴傾向を分析することで、音韻習得過程を明らかにしていく。本研究で調査対象としたのは、中国の A 大学で日本語を学ぶ学習者 14 名、中国の B 大学で日本語を学ぶ学習者 15 名、韓国の大学で日本語を学ぶ学習者 5 名である。

【調査2】日本語学習者を対象とした質的調査

調査1の調査協力者に、調査期間中、練習毎に「振り返り」を提出してもらおう。また、事後アンケートを実施する。分析の観点は以下の通りである。

- ・学習者の自己モニターおよび自己修正の有無
- ・自律学習における学習者の「気づき」

4. 研究成果

(1) e-learning 教材「日本語音 聞き取りクイズ」(大久保 2021)の開発

本 e-learning 教材には二つのコースが設けられており、「Course A」は「ナ行音・ラ行音・ダ行音」、「Course B」は「有声・無声破裂音」を聴取練習するものになっている。

各コースは、「診断テスト」、「クイズ(10回各5問)」、「確認テスト」で構成されている。また、各回のクイズが終わるたびに記入できる「振り返り」機能が備えられている。さらに、いつでも教材開発者に質問できる「Ask Me Anything」、学習者間で交流できる「Communication Board(BBS)」の機能も盛り込まれている。

「クイズ」は学習者が何度でも繰り返し聴取練習できるコンテンツである。「クイズ」の問題は、男女の会話(男性:「〇〇さん、_____行きませんか。」、女性:「えっ、_____?」)の下線部を4~5つの選択肢から選ぶものになっている。下線部には、語中位置および音環境を考慮しながら、ターゲット音(誤聴する可能性がある音)が含まれる実際の地名(日本および海外)を

入れた。なお、クイズの音声は、何度でも繰り返し聞けるようになっている。

「クイズ」は、1問毎に「正解」、「不正解」が表示される。各5問が終わった後に5問全体の「正解」、「不正解」が表示される機能 (View Questions)、また、最初からもう一度練習できる機能 (Restart Quiz) も備わっている (大久保 2022)。

(2) 学習者の音韻習得および誤聴傾向

本 e-learning 教材の「診断テスト」および「確認テスト」使用データの比較から、得点の上昇が見られた。また、学習者は練習によって「無声・有声破裂音」、「ナ行音・ラ行音・ダ行音」の聴取が難しくなくなったと感じていることが明らかになった。これにより、聴取練習によって学習者の聴取能力が向上し、音韻習得が促されたことが示唆された。

また、教材使用データにおける学習者別に誤答の繰り返しが見られた選択肢を分析したところ、繰り返し聴取しても同じように誤聴してしまうパターン (A) がある一方、繰り返すたびに別のターゲット音を誤聴しているパターン (B) が認められた。A の場合、学習者の誤聴傾向に関する「気づき」によって習得が促されることが期待されるが、B の場合は無声・有声の弁別基準が曖昧な状態である可能性があるため、ミニマルペアを用いた練習等で弁別能力を高めていく必要があると考えられる。また、一度、正解した音であっても、次に聴取した際に誤聴してしまうパターン (c) がみられた。このような場合、正解であったとしても、その音が正しく聴取できたと判断するのではなく、正解した音も含めた反復練習が必要であると考えられる。そのためには、教師が学習者に練習方法を提示する、学習者と一緒に練習計画を立てる、学習者の振り返りを共有して練習の継続を促す等、学習者の自律学習を支援していくことが重要であることが示された (大久保 2021, 2022)。

さらに、学習者の音韻習得過程が3つに分類できることがわかった。

タイプ : 自分で誤聴しやすい音、および誤聴傾向が把握できている。

タイプ : 自分で誤聴しやすい音は把握できているが、誤聴傾向は把握できていない。

タイプ : 誤聴しやすい音が把握できておらず、弁別基準が曖昧な状態になっている。

これらの誤聴を改善させていくためには、学習者自身が自分の誤聴しやすい音を絞り込み、誤聴傾向を自己認識することが重要である。学習者によって異なる音韻習得過程があることを踏まえたうえで、教師は指導を行っていく必要があることを示すことができた。

(3) e-learning 教材を使用したブレンディッド・ラーニングのモデル

本研究における大きな研究成果の一つとして挙げられるのは、学習者一人一人のデータを分析することにより、先行研究で指摘されていた誤聴傾向よりもさらに複雑な誤聴傾向があり、個人差が大きいことが明らかになったことである。したがって、教室指導のみによって学習者の音韻習得を促すことは難しく、学習者の自律学習を促し、その学びを教師が支援していくことが重要であることを示した。

本研究で提案した自律学習のサイクルを図1に示す (大久保 2023)。

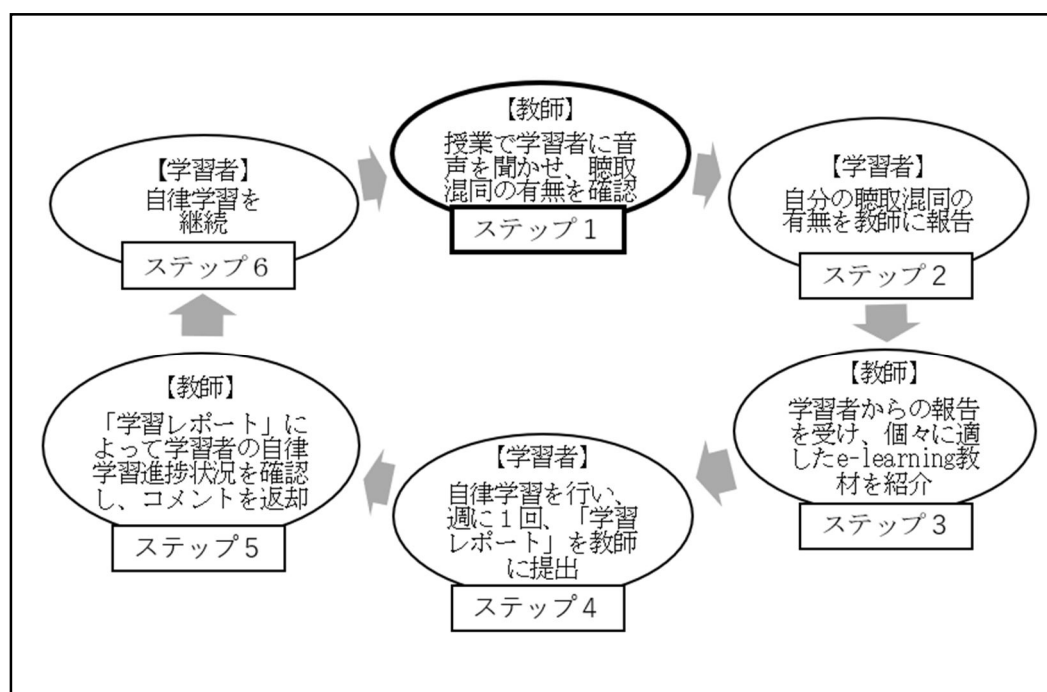


図1 学習者の自律学習を促す学習サイクル (大久保 2023 より転載)

図1の学習サイクルにおける「ステップ1」および「ステップ2」は、本 e-learning 教材の

「診断テスト」、「確認テスト」に相当するパートである。このステップでは、クラス全体で教師が聴取混同しやすい言葉を聞かせ、学習者に問題点の有無を把握させる。次に「ステップ3」では教師が学習者に必要な e-learning 教材を紹介し、自律学習を促していく。本サイクルの中で最も重要なのは、「ステップ4」で学習者が提出する「学習レポート」である。本 e-learning 教材に設置されている「感想」に相当するパートであり、このレポートを提出させることによって、学習者に「気づき」が生まれ、音韻習得が促されると考えられる。さらに「ステップ5」で教師は学習者の自律学習の進捗状況を知ることができる。義永(2018)では自律学習における教師のコメントの重要性が指摘されているが、「ステップ5」で教師が「励まし」「アドバイス」等のコメントを与えることにより、学習者が自律学習を継続していくことが期待される。最後に、学習者の音韻習得には、自律学習の継続が重要であるため(「ステップ6」)、この学習サイクルを繰り返していくことが必要である。この「学習者の自律学習を促す学習サイクル」により、e-learning 教材を使用したブレンディッド・ラーニングが可能となり、学習者の音韻習得を促す一つのモデルを提案することができた。

(4)日本語音声教育への貢献および研究の継続

本研究は、学習者の音韻習得を促すための e-learning 教材を開発し、効果検証を行うことによって日本語教育に貢献することを目指した。當作(2019)では、日本語教育におけるテクノロジー使用の意義を示す理論的研究や実証的研究はまだ少なく、今後、実証的研究を積み重ねて、テクノロジーの使用と教育効果、学習効果の関係を明らかにしていかなければならないことが指摘されている。本研究の成果は、e-learning 教材を使用した日本語音声教育に貢献できたものと考えられる。また、量的調査が中心であった先行研究では見えてこなかった習得過程の個人差が本研究で浮き彫りとなったことにより、音韻習得を促すためには教室指導だけでは不十分であり、自律学習が重要であることを改めて示すことができた。さらに、(3)で提案した「自律学習を促すサイクル」を活用したブレンディッド・ラーニングのモデルは、様々な応用が可能と考えられる。

本研究は現在、JSPS 科研費 21K13035 若手研究「日本語学習者における音韻聴取の研究および教材開発」(研究代表者：大久保雅子)に引き継がれ、本 e-learning 教材は更なる改良を行い、コース増設も行っているところである。本研究で得られた知見を活かし、研究を発展させ、更に日本語音声教育に貢献していく予定である。

<引用文献>

- 大久保雅子(2023)「e-learning 教材を使用したナ行音・ラ行音・ダ行音聴取練習の効果 中国における日本語学習者へのアンケート調査から」『日語教育与日本学研究 大学日語教育研究国際研究会論文集(2021)』7-13, 華東理工大学.
- 大久保雅子(2022)「e-learning 教材を使用した無声・有声破裂音の聴取練習 中国語母語話者を対象として」『日本語教育方法研究会誌』28(2), 136-137.
- 大久保雅子(2021)「日本語音 聞き取りクイズ」
<https://jphedu.com/> (2023年6月10日現在)
- 當作靖彦(2019)「ネットワーク時代の言語教育・言語学習」當作靖彦監修・李在鎬編著『ICT × 日本語教育 情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』2-21, ひつじ書房.
- 戸田貴子・大久保雅子(2014)「新しい音声教育実践における学習者の学び-オンデマンド併用授業における発音学習」『早稲田日本語教育学』16, 1-18.
- 義永美央子(2018)「自律学習支援のための日本語学習記録における教師コメントの分析」『多文化社会と留学生交流』22, 33-46.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大久保雅子	4. 巻 大学日語教育研究国際研究会論文集（2021）
2. 論文標題 e-learning教材を使用したナ行音・ラ行音・ダ行音聴取練習の効果 中国における日本語学習者へのアンケート調査からー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日語教育与日本学研究	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保雅子	4. 巻 28(2)
2. 論文標題 e-learning教材を使用した無声・有声破裂音の聴取練習 中国語母語話者を対象として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 136-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19022/jlem.28.2_136	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大久保雅子	4. 巻 2022年度秋季国際学術大会
2. 論文標題 韓国語母語話者における無声・有声破裂音の習得 e-learning教材を使用した聴取練習から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 韓国日本語文化学会 発表論文集	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 大久保雅子
2. 発表標題 韓国語母語話者における無声・有声破裂音の習得 -e-learning教材を使用した聴取練習から-
3. 学会等名 韓国日本語文化學會 2022年度秋季国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大久保雅子
2. 発表標題 e-learning教材を使用したナ行音・ラ行音・ダ行音聴取練習の効果 中国における日本語学習者へのアンケート調査からー
3. 学会等名 2021年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大久保雅子
2. 発表標題 e-learning教材を使用した無声・有声破裂音の聴取練習 中国語母語話者を対象として
3. 学会等名 第58回 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------